

第十席 目的が違ふ

目的が違ふ

今日話をしたいと思ふ所は一寸分り兼ねる。しつかり聞けよ、阿彌陀さんの目的と衆生の目的が違ふ、阿彌陀さんの思つてござる事と、凡夫の思つて居る事と違ふ、その違ひ目を聞き分けて貰ひたい。

衆生の方の目的考へ望みと云ふものは、命終つたら御浄土、死んだら佛にならせて貰ふが目的だ、阿彌陀さんと凡夫とは同一の目的でないのである。それを同一に扱ふから違つて来る。

吾々の目的望みと云ふものは、命終つたら御浄土、死んだら佛になして貰ふが望み、阿彌陀様はそれはいかんと仰しやる。こゝが一寸あなた方の氣に入らん所だらうと思ふ。

吾々の望みと云ふものは、命終つたら御浄土、死んだら佛であるが、吾々と佛とは一段や二段や三段で無い、五十二段も違ふ。見る事も出来ねば、拜む事も出来ねば想像と思つて見る事も、考へて見る事さへ出来ぬ。何んぼそなたが望んだとて、思つたとて、想像も及ばぬ、考へも及ばぬ所に安心しよう、しつかりしよう、確かにならうと思ふ程、苦しむぞよ、それはやめて置け。こゝが一寸解り兼ねるだらうと思ふ。

見る事も拜む事も想像も出来ぬ

然らば私はどうしたらよい。俺の五劫永劫の目的と云ふものは、そんなものと違ふ、そなたが命終つて御浄土へ参らす目的で無い、俺の五劫永劫の目的は命終つて御浄土へ参らせるが目的で無い。どういふ事が目的です、命終らぬ性根

目的が違ふ

心地の確かなたつた今、墮ちんことの、参ることの、助かる事に仕上げると云ふのが、俺の目的、それが平生業成、一念發起、住正定聚。吾々の望みは命終つて御淨土、阿彌陀さんの方の目的は命終つて御淨土でない、何んばそなたが思つたどて思はれぬ、俺の目的は、命終らぬたつた今、墮ちん事の参る事の助かる事に決めてやりたいといふ、それが平生業成——一念發起平生業成と云ふのはさういふ事。

二 命終らぬたつた今から、見えぬ御淨土が見たより確かになり、参る方より参らぬさきから、参つた思ひにしてやりたいが目的。こゝが少し違ひはしないか。彌陀の目的の方に向はず、目的で無い方に向ふ、そこで安心が出来ず、困つて居るのだ。

今阿彌陀様の目的と衆生の目的と違ふ其譯を話をする。それはお前さん聴聞が悪いからこゝの意味が取り難い。安心出来ぬ。

信心論
誦の段へ

三 あんた方報恩講になると御傳鈔を聞かつしやる。御傳鈔の中にいつも出て來るのは信心論の段。其中に、常隨陀近の徒其數總て三百八十餘人と云云、法然聖人の御弟子三百八十何人あつた。所が其の三百八十何人のお方は、私が常住話をする吾々見たやうな後生の求め方で無い、吾々は人間世界の日暮しが九分九厘、佛法は一厘しか無い。法然上人の御弟子は此世を去つて法を求めた。よう一つこゝを考へにやならぬ。たゞあれを御書きになつたので無い。法を求めめるにはこれ程仰山の御方が此世を去つて法を求められた。所が教へ手は法然上人のやうな偉い方、聴手は吾々のやうな愚かな人は居られぬ。其中で重源と云ふ人は愚かな人であつたけれども無二の信者であつたのである。又高野の明遍僧都は初めのうちは念佛を排斥してゐたが、或る事情の下に弟子になつた。高野の弘法さんから七代目の明遍僧都が南無阿彌陀佛の御化導を聞かつしやつた。其當時念佛の隆んだつたと云ふことは非常なもの、所が三百八十何人の法然上人の御弟子によつ

高野の明遍僧都の念佛

目的が違ふ

て思ひくゝの宗派が出来た。西山・鎮西・九品・長樂寺とて其他あまたにわかれたり、本眞の御信心を戴いた方は僅か五六輩に過ぎず。御化導の講釋聞いたり、朝晩やつて居る、其中で本當の御信心を戴いたものは五六人しかない。今日此御座へ參る方は皆信者ばかりで有難い事ぢや。明けても暮れても御化導聞きづめに聞く、御講釋聞きづめに聞く、それで本眞に聞いたのは僅かに五六人。吾々より非常に智慧の多い、後生の求め方も眞劍、それで僅かに五人か六人。所が法然上人の死後に至つて宗派の分れた事は、西山・鎮西・九品・長樂寺、其他仰山分れた、御文さんを讀んだら分るだらう。

九品寺
の由來

九品寺といふのは昔九條にあつたのである、九つ御寺があつた、九品の淨土にかたごつて出來た。長樂寺は東大谷にある、私等の若い時は長樂寺の縁が泥だらけであつた、よう辨當食ひに行き居つた。今は長樂館とか何とか云つて宿屋か何かになつてしまつた。今日ではなくなつてしまつて居る。法然上人の御弟子で

西山
鎮西
と
眞宗

あるからごの方でも、南無阿彌陀佛の六字のお助けを立てぬものは無い。他方ぢやで南無阿彌陀佛の六字のお助け、これまでは治定であるけれども、南無阿彌陀佛の六字のお助けが違ふ。お助けを信する御信心が皆違ふ。そこで西山・鎮西・九品・長樂寺と宗派が分れた。

彌陀の方は命終つて御淨土でない、命終らぬたつた今參る事の墮ちん事に仕立てあげる、そこに御助けが必要になつて來る。その意味が仰山違ふから、そこで御助けの話をせんならぬ。

四　そこで今一番淨土宗で隆んであるのは西山・鎮西・昔から學寮で西山と眞宗と比較し、鎮西と眞宗と比較して其安心を調べて居る。殊に眞宗坊主が御文を調べるに付いては西山・鎮西を調べんと八十通の御化導は分らぬ事になつて居る。何故ならば八十通は西山鎮西の安心に始終當つての御化導であるから、御助けの様が違ふから分らぬ。

目的が違ふ

西願文眞
宗は成

五 大體本願の文から話さんと分らぬけれども、そんな事を云つては面倒だから話さんが、西山、鎮西は第十八本願の文に付いて御立てなされた宗旨、淨土眞宗は第十八願成就の文から出来た。成就の文はお前さん知つて居るだらう。

其名號を聞いて信心歡喜し乃至一念せむ、至心に廻向したまへり、我國に生れむと願せば、即ち往生を得て不退轉に住す。

其名號を聞いてとは六字のいはれを聞く事、信心歡喜し乃至一念せむ至心に廻向したまへり。彼の國に生せむと願せばその時往生を得て不退轉に住す。身はまだ凡夫なれども、魂だけは往生、後戻りせん事になつた。

そこで第一番に話したいのは六字の御助けの話、知恩院様流の話をするに付いては、知恩院さまでも亦異議があるのだが、ザツと話を置いて置かう。

六 南無阿彌陀佛の六字といふは、善導さまは、南無の二文字は願、阿彌陀佛の四字は行、願行具足の南無阿彌陀佛といふ。お前さんよく知つて居る、南無の二

願行門
の扱

字は五劫の大願、阿彌陀佛の四字は永劫の不行、五劫の大願のかたまりが南無となつた、御淨土へ參らせにや置かんの大願のかたまりが南無となつた。阿彌陀佛の四つの字は永劫の不行のかたまりである。之は私が云はなくてもお前さんよく知つて居る。

南無といふは歸命、またこれ發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふはその行なり、この義をもてのゆゑにかならず往生することを得る。

善導の御化導は願行具足の南無阿彌陀佛である。南無は五劫の大願、阿彌陀佛は永劫の不行がこもつて居る。願と行とが六字の上に成就して居るから、南無阿彌陀佛の六字で往生する。

聖光房
の落着

此話を聞かしてやつて鎮西の聖光房はごういふ風に扱つた、南無の二つを凡夫が墮ちん事に決めた、南無の二字の大願を貰ひ、參らせにや置かんの大願を凡夫が貰つたら、參らせてお呉れるに間違ひない、佛にせにや置かぬの大願を貰つた

目的が違ふ

ら、今死んでも御淨土に參らせてお呉れるに間違ひない、佛になるに間違ひないと思はれるのが南無の二字だといふ。之を心存助給といふ。それから口に南無阿彌陀佛々々々々々と唱へるのが永劫の不行を貫つたしるしだといふ。心に參らせてお呉れるに間違ひないと思ひ口に南無阿彌陀佛々々々々と彌陀の名號を唱へる、願と行とが具足するからさきつと往生する。鎮西では命終つて御淨土へ參らせてお呉れるのを御助けと立てるから、其信心は參らせてお呉れるに間違ひないと思はにや信心にならぬ。お助けと云ふのは、命終つて御淨土へ參らせてお呉れる事がお助けだから、其お助けに夜明けするにはどうする、命終つて御淨土へ參らせてお呉れるに間違ひないと思ふことが信心、これが臨終の夕べまで思ひつづけて行け、口に南無阿彌陀佛々々々々と稱へて、永劫の不行を貫つたと思ふのである。そこで命終つて御淨土へ參らせてお呉れるのを御助けと立てる信心であるから、參らせてお呉れるに間違ひないと思はれるのが信心、これが鎮西流

此頃の
同行の
落着

の信心ぞ。之を心存助給口稱南無阿彌陀佛と云ふ。何でも此中に、ヒヨツとするど宗旨がへして居るやうなお方がありやせんか。聞いて見たいやうな所ぢやね——。八「私はお前さんに聞くが、常住此寺へ參つて居られるが、安心が出来たか、夜明けが出来たか」、膝詰の所ぢや。「安心出来ました疑ひ晴れました」。「どう夜明けした」。「はい、地獄より行場のない此奴を、今命終つても參らせてお呉れるに間違ひない、と夜明けしました。疑ひ晴れました」。「それが信心か」、「大方信心ぢやらうと思ふて居ります」。これなら鎮西流ぢや。よう一つ聞き分けて貰ひたい。私が聞いたら、さう云ふぢやらう。「我機眺めて見ると、日々夜々に三毒五慾、此落ちるより外にしかたのない奴を參らして下さるに間違ひないと安心しました」、「それが信心か」、「マア、信心ぢやらうと思ふ」。これは鎮西流ぢや。昨日言つたらう三願の譯を。斯う云ふ所に居られる人は第十八願の宿善に大變遠いのだ。之は詰り十九願の機類と云ふ。第十八願の宿善にはまだ、程遠いので

ある。

併し、淨土眞宗では、地獄より行場の無いと思ふ思ひはあるものか無いものか。あるものだ、併し信心ぢやない、それは後念の喜び。鎮西の言ふ所は、眞宗では後念の喜びに扱ふ。淨土眞宗の一念の信心は別にある。西鎮兩家で安心とする信心とするものを淨土眞宗は後念の喜びに扱ふ。何時命終つても參らせて御呉れるに間違ひない、之は後念、棺桶に足を入れるまで相續する、日々夜々に喜ぶ、それはなけりやいかぬ。一念の信心と云ふのは一おもひで萬劫の命拾ひをするのである、そこを聞き分けんならぬ。

そこで鎮西では、知恩院様流では、命終つて御淨土へ參らせてお呉れるに間違ひないと思はれる事を信心として居る。眞宗ではそれは信心にせぬ、後念の喜びにする。お前さん、參らせてお呉れるに間違ひないと思はれることを信心として居るなら、第十八願には、ほど遠い。後生大事の思ひが無い、それだから遣損ひがあ

る。參らせてお呉れるに間違ひないと夜明けして居つても、愈今夜でも行かんならんと後生に大事がかゝつて來ると、間違ひないとは思はれるけれども、何にも無いが、よからうかが必ず出て來る。それを信心にした不調法がこゝに來る。命終つたらお助け、死んだらお淨土とお助けが向ふにあつたら、たつた今でも無常の風にさそはれたら魂ごうちや、と云つたら、助けて御呉れるに間違ひないとは疑ひ晴れて居る。けれども愈となると、何にもないがよからうか。首を捻つて來る。こゝに不調法が出来る。平生はよいが、愈臨終の夕べになつて、うろたへたとて、もう間に合はぬ。

眞宗では一念の信心であつて、其一念の信心の當體に萬劫の命拾ひをする。

一念をもつては往生治定の時刻とさだめ、そのときいのちのぶれば自然と多念におよぶ道理なり。

見えぬ淨土も見たよりもと云ふ丈夫が出て來る。その所を聞き分て貰ひたい。

目的が違ふ

それから西山、京都ならば京極へ行つて誓願寺さん、あれは深草流の本山、又粟生の光明寺、あれは光明寺派の御本山。之はどう立てるかといふと、お助けを二度立てる。どう二度立たてるかと云ふと、命終つて御浄土へ参らせて貰ふと立てる、十劫曉天のお助けと今の御助けと二つ立てる。正覺成就の時に御助けにあふ、今御助けにあふ、之は安心決定鈔を讀むとわかる。近來は安心決定鈔を眞宗のお聖教として取扱ふ人が澤山あるので、よく安心決定鈔の文を眞宗の安心のやうに心得て居るものがある。大きな間違ひ。蓮如さんは死の中から金を掘り出す思ひで讀め、みんな死だけども其中によい事がある。之を知らず全部用ひたら大間違ひである。近來眞宗にさういふものがあるので困つて居る。

そこで西山家では十劫曉天の御助けと云ふが、それはどういふ事か。本願から來るから斯うなつて來る。

十劫曉天の御助

設ひ我佛を得んに十方衆生至心に信樂して我國に生れむと欲ふて乃至十念せ

む、若し生れずば正覺を取らじ。

衆生が佛にならなんだら俺は阿彌陀にならぬ、衆生の往生がさきで彌陀の正覺は後になつて居る。お前さん御馳走食はぬさきは俺は何にも食はぬ、衆生が佛にならんなら阿彌陀にならんといふ約束で阿彌陀となつた、それを今迄知らずに迷うた。十劫曉天に助かつて居つたものを知らずに迷つて來た、それを今お助けにあふ。之を十劫曉天のお助けと云ふ。黑板に書かんと分らんやうな事ぢや。

十 所が浄土眞宗の立方はこれから彌陀の目的と衆生の目的と違つた話をする。浄土眞宗の立方は二つ立てる。體の命終つて御浄土へ参らせてお呉れる御助けと今の御助け、正定聚のお助けと滅度のお助けと二つ立てる。

正定と滅度とは、一益とこゝろうべきか、また二益とこゝろうべきや。……一念發起のかたは正定聚なり、これは穢土の益なり。つぎに滅度は浄土にてうべき益にてあるなり。

目的が違ふ

一益か
二益か

二遍お助けにあふのだと云ふ。命終つた御浄土へ参らせてお呉れるお助けと、性根心地の確かなたつた今のお助けと二度ある、之は私が云はなくても御承知の事。

一寸シツカリ聞いて置け。まだ、お前さん、もう一遍位やらんならん事がある、そこで浄土真宗にはお助けが二度ある。

眞實信心の行人は、攝取不捨のゆゑに、正定聚に住す、正定聚に住するがゆゑにかならず滅度にいたる。かるがゆゑに、臨終まつことなし、來迎たのむことなし。

現在安
宗の
敬

今お助けにあづかれば、ほつて置いても命終つたら御浄土、死んだら佛。あゝア、難かしい〜。

命終つて浄土に参らせて貰ふ事を望むなら、佛にならせて貰ふ事を望むなら、そつちや向かんと置け、思へば思ふ程、そなたは苦しむぞよ。命終つて御浄土、

死んだら佛になることを今から手握りしたい。大丈夫と思ひたいならば、命終つて御浄土に参らせて貰ふ方のお助けには目を着けるな。妙な事ぢやぞ。

然らばどうしよう。性根心地の確かなたつた今、御助けに今あふから、今お助けにあづかつたものならば、身の臨終の夕べは、水に溺れて死なうとも、火に焼かれて死なうとも、たとひ前生の約束で氣狂ひになつて、後生も菩提も忘れて此世を終つても、今御助けにあづかつたものならば、身の臨終はおつ放し。何時でも大丈夫と喜ばれる。これが平生業成。

大
が
今
丈
夫

命終つて御浄土へ参らせて貰ふことを手握りしたくば今御助けにあふ。今御助けにあづかつたものならば、向ふは見えんでも大丈夫、知れんでも大丈夫、分らんでも大丈夫と云ふ丈夫が出て来る。今御助けにあづかつたと云ふ思ひの無いものならば、命終つて御浄土へ参らせて貰ふと云ふ喜びは起きぬ。今御助けにあづかつたといふ思ひのあるものならば、何時でも無常の風は来い〜と喜ばれる。

目的が違ふ

そこで目的が違つた、お前様の方は、命終つて御浄土へ参らせて貰ふが目的であらう。俺の目的は違ふ。命終つて御浄土で無い、命終らぬたつた今、墮ちん事の、参る事の助かる事にちやんときめてやるといふ事に、俺が待ちかねて居る。そこで御和讃を讀んで見よ。

超世の悲願きゝしより

われらは生死の凡夫かは

有漏の穢身はかはらねど

心は浄土にすみあそぶ。

變らず
に變る

如來の本願聞えてから、我等は迷ひの凡夫で無い。姿形は昔の通り、膿血のたれる、欲しや可愛は變らぬ。有漏の穢身は變らねど、變つた事が一つある、心は浄土に住み遊ぶ。大丈夫と歡ばせて貰ふ。

眞宗では、今ちやんと、おちん事の、参る事の、助かる事に決めて下さる御助

けが南無阿彌陀佛、お前さん早う行くからいかぬ。此お助けにあつた後なれば、何時でもと喜べる。眞宗の平生業成とはそこをいふ。平生業成とは、平生の時往生の業事が決まつてしまふ。決まつてしまふから、向ふは見えんでも何時でも大丈夫。

信の一念肝要とはこゝをいふ。御浄土参りの方でなく、墮ちん事、参る事、助かる事に今ちやんと仕立て上げて下さる事が南無阿彌陀佛、墮ちん事、参る事に仕立てあげて貰ふから何時でもと喜べる、さうせねば喜ばまいではあるまいか。さうでなければ安心出来ぬ、落着けぬ。

無茶苦
茶な
助け

十一 此間、斯う云ふ面白い話がある。私が同行に尋ねた、お前さんどうちや安心出来たか、安心至しました、疑晴れたか、晴れました、どう疑ひ晴れた、何時命終つても参らせて貰へると夜明けしました。上等等々と云つて居つた。夜明けしたら結構、安心したら結構、お前さん、今行かんらんと思ふと、手に物

目的が違ふ

を握つたやうに大丈夫と思へるか、思へません、思へませんけれども、思へんなりのお助けで行きませう、面白いね。お前さん、何時命終つても大丈夫と思へるか、大丈夫と思へません、大丈夫で無いなりの御助けか、こつちは大丈夫となれん、しつかりにもなれん、けれども此儘お助けにあひませう、それはお前さんいかぬ、それが疑ひといふもの、参らせて貰へるに間違ひないと落着いた、自分の胸は確かに無いけれども御助け大丈夫でないけれども御助け、それは無茶苦茶な御助けぢやぞ。おかしなものぢやね。これが餘程聴聞した人ぢや。これで居られる人なら樂ぢや、こゝに居られる人なら宿善の浅い人ぢやぞ。難かしい話ぢや。思へぬなり、分らぬなり、承知せんなりの御助け、無茶苦茶ぢや。どこに御信心がある、参らせてお呉れるに間違ひない、向ふにある。自分の方は安心出来ぬ、落着けぬ、夜明けが出来ぬなりの御助け、これが世の中には澤山あるのぢやが、危ない話ぢやねえ。

宿善の
浅い人

向ふが
明ける
助ける
はだか
らんか
いで

ようこ
そ其氣
に

十二 淨土眞宗はさうでは無い。一念と云ふはどこにあるかといふと御淨土の方にあるのでない。参る事の墮ちん事の助かる事に今決めて下さる御助けが南無阿彌陀佛。墮ちんことの参る事の助かる事の御助けにあふといふ事はどういふ事か、墮ちる機が御助けにあふ、墮ちる機が御助けにあふて墮ちん機に轉じ變る所が南無、南無となつた機は娑婆五十年守りづめに護つて下さる、之がたのも機、墮ちる機御助けは阿彌陀様が受持つ御助け、引受ける御助け、受取る御助け、そこで私の墮ちる機を彌陀に引受けて貰ふ、受取つて貰ふ事を南無といふ。南無となつたから、娑婆五十年、ようこそ其氣になつたと守りづめに護るのを阿彌陀佛の四つの字の御助けと云ふ。南無阿彌陀佛の六字の御助けといふのはさういふ事。平生業成は死んでからでない、今の事。之は此間一口言つて置いたが、こゝには若い人も御出でだから、家へ歸つて讀んで下さい、南無阿彌陀佛の六字の謂れは私が言ふので無い。八十通の御化導がさう書いてある、南無阿彌陀佛の六

目的が違ふ

字は死んで御淨土に參る道具に使はぬ、性根心地の確かなたつた今御助けにあづかる謂れが南無阿彌陀佛。年寄りはずき内へ歸れば寢てしまふが、若い人は内へ歸つて讀んで呉れ。一帖目の第四通、之は自問自答と云つて大事な御文。これが眞宗坊主の扱ふ一番大事な御化導。一番初めに

大事
な御
文

抑、親鸞聖人の一流にをいては平生業成の儀にして來迎をも執せられさふらはぬよし、うけたまはりおよびさふらは、いかゞはんべるべきや。

臨終を待たぬ、お迎ひを受けぬといふのはどういふ事か、

おほよそ、當家には、一念發起平生業成と談じて。

一念の信心の起つた時に、ちやんと往生の決まりがつくと談じて、其平生業成の謂れは、

平生に、彌陀如來の本願の、我等をたすけたまふことほりをきゝひらくこと
は、

彌陀如來の本願といふは南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛の本願の、私を助けて下さる事を聞き分ける事は、一世や二世の御恩ではいかんぞよ。宿善の開發によらんと貰へぬ。

宿善の開發によるがゆるなり、とこゝろえてのちは、わがちからにてはなかりけり、佛智他力のさづけによりて、

一世や二世では聞えんぞよ、長い間の御養育によらねばならんぞよ、愈今

本願の
由來

本願の由來を存知するものなりとこゝろうるが、すなはち平生業成の儀なり。

されば平生業成といふは、いまのことほりをきゝひらきて、往生治定とおも

ひさだむるくらゐを、一念發起住正定聚とも、平生業成とも、即得往生住不退轉ともいふなり。

それから一番お文さんの最後に、

信心決定するすがた、すなはち平生業成と不來迎と正定聚との道理にてさふ

目的が違ふ

らふよし、分明に聴聞つかまつりさふらひをはりぬ。

腹帯し
めてよ
く聞け

信心決定といふ事は、今御助けにあづかる事に納得した事、今御助けにあづかることに夜明けすること、お前さん等聴聞するの後に後程分明に腹を据えて聴聞せんと一代の間骨折しながら一念多念を知らずにゴチャ／＼にしてしまふ。それでは分らぬ道理。一念は命終つて御浄土へ参る方と違ふ。阿彌陀様に今御助けにあづかる事が一念、六字の御助けに今あづかる事が一念ぞ。後念相續の方は、御浄土へ参らせて貰ふ事を喜ぶ方、一念と後念との事分をよく心得んならぬ。一念は御浄土に参る事に今仕立て上げて貰ふ事に得心する事。そこをよく心得て貰はんならぬ。こゝから間違ひが起つて来る。吾々若い時からたのむ事に力を入れる、非常に骨折つた事ぢやが、お前さん等骨折る事は要らぬ。彌陀をたのむといふ事は、此後生一つに困りはてた事を、彌陀が引受けてやらうぢやによつて、引受手を力にする事をたのむといふ。別に難しい事はない。一念は命終つて御浄土へ参ら

落しは
念力の

せて貰ふ事ではなくして、性根心地の確かなたつた今御助けにあふ。其御助けは二字四字の御助け。墮ちる機を彌陀が受取つて、墮しはせんといふ念力を與へる。こつちが墮ちん機に轉じ變つた。正定聚の機に轉じ變つた機の名前を南無といふ。南無になつた機を娑婆五十年守りづめに護つて貰つて見い、これで墮ちられるか、墮ちられまい。墮ちる機は彌陀に渡し、墮としはせん念力を貰ひ、おまけに攝取の光明に護られづめなら墮ちられまい。向ふは見えんでも大丈夫が出て来る。此筋をよく心得て置かんといかぬ。六字の謂れを聞いて、私が今御助けにあふ、墮ちる機が御助けにあつて墮ちる機は彌陀が受取つてしまつて、墮としはせん念力を貰ふ。貰ふなり渡すなり、渡すなり貰ふなり、一念同時、そこを雜行棄て、彌陀たのむ、墮ちる機を彌陀に渡し、引受けるといふ親切に納得する。墮ちる機を向ふに渡して、墮とさんといふ念力が此方のものになる、なつた名前を南無といふ。南無になつた機を、ようこそ其の機になつたぞ守りづめに護つて貰

目的が違ふ

四〇九

ふ御助けが阿彌陀佛。此六字の謂れをよく心得るものを他力の大信心、墮ちる機を向ふに渡し、墮しはせん親の念力に、今日は腹が満れて、おまけに、攝取の光明でお護りづめ。

いかに地獄におちんと思ふども、彌陀如來の攝取の光明におさめとられまゐらせたらん身は、わがちからにては地獄へもおちずして極樂に參るべき身なるがゆるるなり。

私ばか
今日はもうおちたうても墮ちられぬ、逃げたうても逃げられぬ。そこまで行かねば本真に手握りは出来ぬ。何時無常の風にさそはれても、私ばかりは彌陀同體、どこで云ふか、向ふ眺めて云ふのぢや無い、今六字の御助けにあづかつて、墮ちる機は彌陀に渡し、引受けるといふ親の念力に得心出来、おまけにお護りづめなら仕方がござりませぬ。何時でも、手握した喜びぢやぞ。

命終つて御淨土に參る事はやめて置きなさい、安心出来ぬ、墮ち相な、參れさ

泣く機
つが受く機

うにない。困つたか、困りました。それを困らんやうに自分でなりたくは三僧祇百大劫我手で始末がつかんと分つたら、受持つ親が待ち兼ねて居る。墮ちると知つたら、其機かゝへて泣くのぢや無い、參れんと分つたら其機かゝへて泣くのぢや無い。其機受持つ爲に十劫以來坐るひまなく、我にまかせよ、我のため、と喚び通し。そこで渡した相が、雜行捨て、後生助け給へ。これなら、どうなる、斯うなるの世話要らぬ。受持つ親があるなら行きませう、引受手があるならば、それでよい、渡すのだぞ、ようこそ其機になつたぞよ、此彌陀は命懸けでも離れはせん、此六字の御助けに今あふ事に納得が出来たら今度どうなる、御淨土參りは見んでも大丈夫、拜まんでも大丈夫、知れんでも大丈夫。向ふ眺めて云ふのぢや無い、墮ちる機を彌陀に渡す。おまけに攝取の光明におさめ取られて逃げたうても逃げられませぬ。ひとりでに喜ばせて貰ふ。此上は何時でも無常の風は來い來い、死にたい事はなけれども御縁つきたら何時でも彌陀同體と喜ばせて貰ふの

目的が違ふ

が平生業成……………。

此機の儘では助からん

四一三